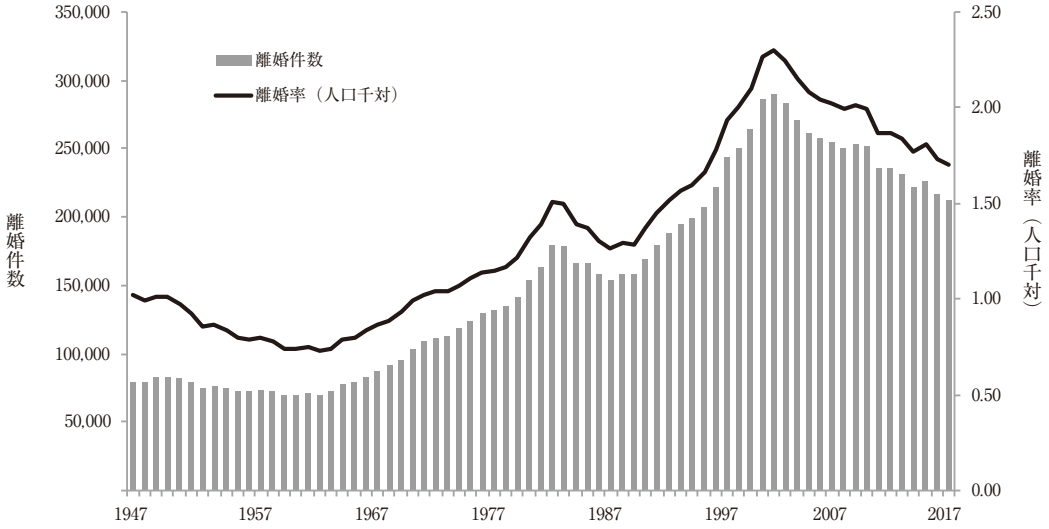
恋愛関係はどのように崩壊するのか
―第三者の参入有無に着目して―

鬼　頭　美　江

1　問題

対人関係を維持することは、個人の精神的健康を促進する。例えば、仲のいい友人がいない人に比べて、友人がいる人の方が、精神的に健康であり(Hartup & Stevens 1997)、未婚者よりも既婚者は主観的幸福感が高い(桑原 2017)。しかし、すべての対人関係が長続きするわけではなく、いずれ崩壊する関係が多い。日本の離婚件数は、2002年に29万組に達したのをピークにその後減少しているものの、2017年の最新の統計でも21万組の夫婦が離婚している(図１参照)。この数値は、一度、婚姻関係が結ばれたとしても、その後解消される可能性が低くないことを示している。婚姻関係を含め、恋愛関係は、どのような状況で崩壊することが多いのだろうか。本研究では、第三者の参入有無および参加者の立場によって恋愛関係の崩壊状況を５つ設定し、それぞれの経験者がどの程度存在するのかを検証した。

恋愛関係の崩壊に関する研究は、関係の継続・崩壊を予測する要因に関する研究と、関係崩壊後の感情や行動に関する研究に大きく分けられる。恋愛関係の継続・崩壊に関する代表的な理論モデルは、Rusbult (1980)による投資モデル(Investment Model)である。投資モデルによると、関係継続・崩壊を直接的に予測する



出典：2017年人口動態統計(確定数)

図１　離婚件数および離婚率の年次推移

要因は、その関係を長期的に維持しようという意図を指すコミットメント（Commitment）である。コミットメントは、以下の３つの要因によって規定される。１つ目の要因は、特定の関係に対する満足感（Relationship Satisfaction）であり、満足感が高いほど、コミットメントが高い。２つ目の要因は、それまでにその関係に費やした物質的、金銭的、時間的な資源、およびその関係が崩壊したら同時に失ってしまう資源を指す投資量（Investment）である。投資量が多いほどコミットメントが高い。３つ目は、代わりとなりうる他のパートナーの質（Quality of Alternatives）であり、他に代わるパートナーが魅力的であるほど、コミットメントは低くなる。コミットメントを予測する関係満足感は、さらに、特定の関係から得られる利益、関係を維持するために負担するコスト、およびその関係に対する期待度によって規定される。特定の関係から得られる利益が多く、維持するためのコストが少なく、その関係に対する期待よりも現在の関係が良好であるほど、その関係により満足する。つまり、投資モデルにおける関係継続の予測とは、その関係に対する満足感が高く、投資量が多く、他に代わるパートナーの質が低いほど、コミットメントが高く、関係が継続しやすい。一方、関係満足感が低く、投資量が少なく、他に代わるパートナーの質が高いほど、コミットメントが低く、関係が崩壊しやすい（Rusbult 1980）。縦断研究（Rusbult 1983）においても、関係満足感、投資量、代替パートナーの質が後のコミットメントを予測し、投資モデルを構成する他の要因に比べコミットメントの方が関係継続に対してより強い予測力を示していた。

関係継続・崩壊の予測因については、対人関係研究者の関心が高く、これまで多くの研究が行われてきた。先行研究で特定されたそれぞれの要因の予測力を検討するため、Leら（Le, Dove, Agnew, Korn, & Mutso 2010）は、過去33年間にわたって報告された137の研究のメタ分析を行った。その結果、投資モデルと一貫して、コミットメントが関係継続の最大の予測因の一つとして特定された。その他にも、パートナーに対する愛情、パートナーとの一体感（Inclusion of Other in the Self）、パートナーへの依存が関係継続を有意に予測しており、性格特性などの個人要因よりも二者特有の要因の方が関係解消に対してより強い予測力を示していた。

関係崩壊に関するもうひとつの研究テーマは、関係崩壊後の感情と行動についてである。日本人大学生を対象とした研究（和田 2000）では、関係が進展していた人ほど、関係崩壊時に悲しみなどのネガティブ感情をより強く感じ、関係崩壊後に別れを悔んだり、相手のことをよく思い出したりする「後悔・悲痛行動」や、よくデートした場所や相手の家へ行くといった「未練行動」をとっていた。同様に、元パートナーに対するコミットメントが高かった人ほど、関係崩壊後により強いストレスを感じていた（Fox & Tokunaga 2015）。つまり、その関係が進展していてコミットメントが高いほど、関係崩壊が個人の精神的健康によりネガティブな影響を持つのである。

上記のように、関係崩壊を予測する理論モデルや予測因に関する実証研究、および関係崩壊後の感情・行動に関する研究は多く存在するが、関係崩壊そのものがどのように起きるかについての研究はほとんどない。例外としては、Schmittら（e.g. Schmitt et al. 2004; Schmitt & Buss 2001）によるMate Poachingに関する研究が挙げられる。Mate Poachingとは、「既に恋愛関係にある個人を惹きつけようと意図された行動」（Schmitt & Buss 2001: 894）と定義づけら

れる。言い換えると、他者のパートナーを自分と交際するために「奪う」行動のことである。Schmitt & Buss (2001)では、大学生か一般成人かに関わらず、52－63％のアメリカ人参加者が他者のパートナーを奪おうとした経験があり、30－35％の大学生および41－53％の一般成人が、自分の交際していたパートナーを他者に奪われた経験があることが示された。この研究がサンプル数の少ないアメリカ人に限定されていたため、Schmittら(2004)は日本を含む53ヶ国で主に大学生を対象とした国際調査を行った。その結果、全体の57.1％の男性および43.6％の女性に他者のパートナーを奪おうとした経験があった。東アジアに限定すると、これらの割合は、男性47.4％、女性33.5％であった。これらの数値は、奪おうという意図を持った経験がある参加者の割合を表しているが、実際に他者のパートナーを奪った経験率も、男性で46.19％、女性で35.23％であり、東アジアに限定すると36.92％の男性、25.3％の女性にパートナーを奪った経験があった。日本人とカナダ人大学生を対象にした調査(鬼頭 2014)では、日本人男性の12.5％、女性の8.1％に他者のパートナーを奪った経験があり、日本人男性の12.2％、女性の4.8％に自己のパートナーを他者に奪われた経験があった。これらは、Schmittら(2001)の研究よりも低い経験率である。つまり、１割から３割前後の参加者に、他者のパートナーを奪った経験、自分のパートナーを奪われた経験があったのである。

しかし、これらの研究は、大学生のみを対象としており、「奪った」「奪われた」という2つの関係崩壊状況に限定されていた。本研究では、関係崩壊後、新たな関係がどのタイミングで形成されるかによって大きく２パターンに分けて検討した。一つは、ある関係が崩壊し、一定の空白期間を経て新たな関係が形成される状況である。新たな関係が形成されるタイミングは個別の関係によって異なるため、既存の関係がどのように崩壊するのかに着目し、自らが別れを切り出す「パートナーを捨てた」状況とパートナーから別れを切り出される「パートナーに捨てられた」状況を検討した。もうひとつのパターンは、既にパートナーのいる個人が、第三者との新たな関係を形成するため、交際中の相手との関係を断つ状況である。これは、回答者の立場によって、現在交際中の個人が既存の関係から新たな関係へ「乗り換えた」状況、第三者と交際しているパートナーが自分と交際するために関係を解消した(「奪った」)状況、そして自分が交際しているパートナーが第三者と交際するために自分との関係を解消した(「奪われた」)状況に分けられる。本研究では、参加者の対象を一般成人に広げ、上記５つの関係崩壊状況について調査した。

既存の恋愛関係に参入し自分との交際を求める人とは、どのような特性を持っているのだろうか。Schmitt & Buss (2001)の研究では、実際にパートナーを奪った経験は性格特性との関連が見られなかったが、協調性および勤勉性が低い人ほど、他者のパートナーを奪おうとした経験があることが示された。それ以外の研究では、奪い合い経験がある人の個人特性について検討されていないという限界があった。本研究では、奪った相手とその元パートナー、乗り換える前のパートナーと後から交際することになったパートナーの魅力度と、二者それぞれが知り合いだったかどうかに焦点を当てて検討した。

２　方法

(１)　参加者

本研究には、205名の男女が参加した。そのうち、質問紙の内容を精読しなかった参加者

として、どの選択肢も選ばないよう教示したSatisfice項目に回答していた74名のデータを除外した（Satisfice項目の詳細については、以下の「質問項目」参照）。残りの131名（男性57名、女性73名、その他1名；独身78名、既婚50名、未回答３名）のデータを分析対象とした。平均年齢は38.48歳（*SD*=9.95）であった[(1)]。

（2） 手続き

参加者の募集には、クラウドソーシングサービス（Lancers）を利用した。質問紙調査への参加者募集の案内をLancersに掲載し、関心のある参加者が募集案内に掲載されたURLにアクセスし、インターネット上に設置された質問紙に回答をした。参加者には、Lancersを通じて、報酬を支払った。

（3） 質問項目

参加者が過去に何人の異性と付き合ったか（告白などを通して恋人関係になったか）について、１=「０人」～11=「10人以上」の11件法で尋ねた。以下の項目は、過去に交際経験のある参加者にのみ提示した。

参加者が過去にどのような恋愛関係崩壊状況を経験したのかを尋ねるため、以下の５種類の状況（鬼頭 2014）を提示した：１.「あなたが恋人を捨てた（恋人以外に付き合いたい異性がいたわけではないが、自分から恋人と別れた）」、２.「あなたが恋人に捨てられた（あなたの恋人に、あなた以外に付き合いたい異性がいたわけではないが、別れを告げられた）」、３.「あなたが恋人を乗り換えた（あなた自身が、別の相手と付き合い始めることを理由に、付き合っていた恋人と別れた）」、４.「あなたが他者の恋人または配偶者を奪った（別の相手と付き合っていた異性、または結婚していた異性が、あなたと付き合い始めることを理由に相手と別れた）」、５.「自分の恋人を奪われた（あなたの恋人が、あなた以外の相手と付き合い始めることを理由にあなたと別れた）」。上記それぞれの状況を何人の異性との間で経験したかを測定するため、１=「０人」、２=「１人」、３=「２人」、４=「３人」、５=「４人」、６=「５人以上」のアンカーを用いた。それぞれの状況について、「２人」以上を選択した参加者が少なかったため、分析では「０人」を選択した参加者を「経験なし群」、それ以外を選択した参加者を「経験あり群」とした。

パートナーを奪った経験のある参加者には、パートナーの魅力度、奪ったパートナーの元交際相手の魅力度、および参加者自身がパートナーの元交際相手と知り合いだったかどうかを尋ねた。パートナーを乗り換えた経験がある参加者には、先に付き合っていたパートナーの魅力度、後から付き合うことになったパートナーの魅力度、その二者が知り合いだったかどうかを尋ねた。魅力度の測定には、１=「全く魅力的でない」～６=「非常に魅力的である」の６件法を用いた。

本研究のようなインターネット上で行う調査では、「協力者が調査に際して応分の注意資源を割こうとしない」（三浦・小林 2015a：１）回答行動であるSatisfice行動が問題視されている（三浦・小林 2015b）。教示文や質問項目に十分な注意を払っていない参加者を特定するため、全参加者に対して質問紙の終盤に三浦・小林（2015a）のSatisfice項目を改変して用いた。上記のインターネット調査における問題点を簡潔に説明したうえで、「以下の３つの質問には回答せずに（つまり、どの選択肢もクリックせずに）、次のページに進んでください。」と教示した。そのうえで、「自分の知識や経験を社会のために生かしたい」などの本研究とは無関係の３項目と「あてはまらない」～「あてはまる」

の５つのアンカーを提示した。誤ってクリックした旨をコメント欄に記入した１名の参加者を除き、これらの項目に何らかの回答があった参加者のデータを分析から除外した。

最後に、デモグラフィック項目として、参加者の性別、年齢、既婚・未婚に回答を求めた。

３　結果

（１）　各関係崩壊状況の経験有無

それぞれの関係崩壊の状況を経験した人がどの程度いるのかを検討するため、経験した人と経験していない人の割合を算出した（図２参照）。過去に交際経験のある人のうち、新たに交際するパートナーがいない状況で自分から別れを切り出し、パートナーを「捨てた」経験のある参加者が64.91％、パートナーから別れを切り出され、パートナーに「捨てられた」経験のある参加者が52.63％と、どちらも半数以上であった。一方、既存の恋愛関係に第三者が参入し、関係が崩壊した状況では、自分が交際中に新たなパートナーへ「乗り換えた」経験のある参加者が28.95％、他の相手と交際中のパートナーを自分と交際するために「奪った」経験のある参加者が21.05％、自分が交際中のパートナーを他の相手に「奪われた」経験のある参加者が31.58％であった。これらはいずれも20－30％程度であり、第三者が参入しない関係崩壊状況に比べ、経験者が少なかった。

（２）　特性

第三者を含む関係崩壊に関わった人物の魅力度について平均値を算出したところ、参加者が奪った相手の魅力度の平均値はM=4.96（SD=0.81）、奪った相手が交際していたパートナーの魅力度平均値はM=3.68（SD=1.29）であった。乗り換えた経験のある参加者は、先に付き合っていたパートナー（M=3.88，SD=1.08）に比べ、後から付き合うことになったパートナー（M=4.94，SD=0.75）の方がより魅力的であると評価していた、$t(32)=5.60$，$p<.001$。

乗り換えた経験のある参加者のうち、先に付き合っていたパートナーと後から付き合うことになったパートナーが知り合いだった割合を算出したところ、乗り換える前と後のパートナー同士が知り合いだった参加者は１名（3.03%）のみで、知り合いでなかった参加者が32名

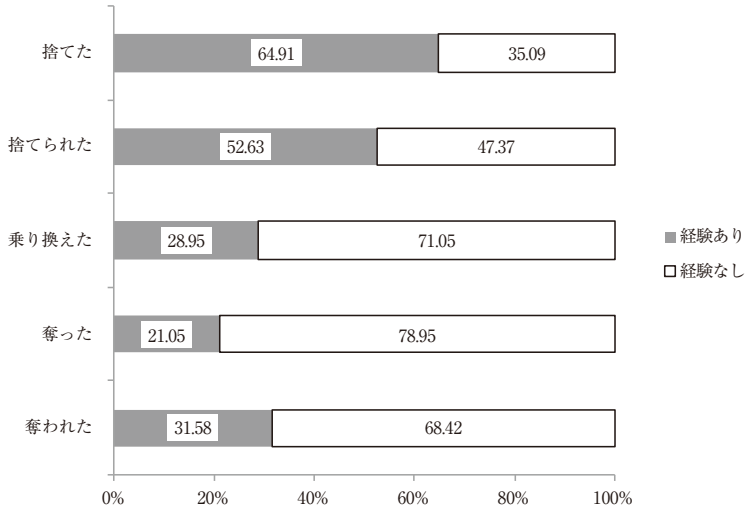


図２　各関係崩壊パターンの経験有無

（96.97%）であった。一方、奪った経験のある参加者のうち、奪った相手の元パートナーと知り合いだった参加者は８名（33.33%）、知り合いでなかった参加者は16名（66.67%）であった。これらより、第三者が参入する関係崩壊の状況では、参加者の立場によって先に交際していたパートナーと後から交際することになったパートナーが知り合いである割合が異なることを示している。

４　考察

本研究では、５つの恋愛関係崩壊状況に関する経験率、および第三者が関係崩壊に関わった状況における個人の特性について検討した。その結果、関係崩壊が起きる際、半数以上の参加者にとって、関係崩壊が新たな関係を形成するためではないことが明らかになった。一方で、20－30％の参加者が、第三者が関わる関係崩壊を経験していた。後者の結果は、大学生を対象にした鬼頭（2014）で示された割合（５－12％）よりも高かったが、Schmittら（2004）で東アジアの結果（30％前後）として示された割合よりも若干低かった。本研究は一般成人を対象としているため、年齢とともに交際経験を得て様々な関係崩壊の状況を経験したことによって、鬼頭（2014）と比較して割合の増加につながったとも考えられるが、Schmittら（2004）での割合よりも低いことの説明にはならない。Schmittらでは、日本の他に、香港、韓国、台湾のデータもまとめて分析されているため、日本のみの結果は明らかではない。日本人のみを対象とした割合が、本研究や鬼頭（2014）の結果に近い可能性も考えられる。

交際中にパートナーを乗り換えた経験のある参加者は、先に付き合っていたパートナーよりも、後から付き合ったパートナーの方が魅力的であると評価していた。さらに、乗り換える前と後のパートナー同士が知り合いだった参加者はほとんどいなかったが、奪った経験のある参加者の３割が、奪った相手の元パートナーと知り合いだった。後者の結果は、参加者自身が知り合いであるかという認知に関しては正確性が高いと推測されるが、他者同士が知り合いであるかを参加者自身が認知しておらず、実際よりも低い割合となった可能性も考えられる。これらの結果は、第三者が参入する関係崩壊では、立場によって回答が異なるため、当該の三者全員を対象とした研究の必要性を示唆している。ただし、恋愛関係の崩壊直後に、その関係に参入した個人を含めた三者を対象とした調査を行うことは容易ではないだろう。

（１）　本研究の限界

本研究は、クラウドソーシングサービスを利用して、参加者の募集を行った。そのため、サンプルの代表性が十分とは言えず、本研究の結果を日本の一般成人全体に一般化することは難しい。上記のように、経験率に関して、先行研究の結果との差異が見られたため、より代表性の高いサンプルでの追試が求められる。

また、質問項目に十分な注意を払っていない参加者が多く、質問紙に回答した205名中74名（36.10％）がどの選択肢も選ばないよう教示されたSatisfice項目に回答していた。この数値は、調査会社のモニターを対象とした調査（三浦・小林 2015a）での違反率（51－84％）よりも低かったが、インターネット調査データの正確性を追求する上で決して無視できない値である。インターネット調査を行う際には、質問内容に注意を払いやすい質問紙の構成やデザインを用いたり、教示文や質問項目を精読している参加者のみが分析対象となるようスクリーニングすることが必須である。

（2） 今後の展望

本研究では、日本においてどの関係崩壊のパターンが顕著であるかを検討し、第三者が参入しない関係崩壊状況の経験率が高いことが示された。しかし、Schmittら(2004)や鬼頭(2014)で第三者が関わる関係崩壊状況の経験率に社会差が見られたように、いずれの関係崩壊状況が顕著であるかが社会によって異なる可能性が考えられる。具体的には、自らの選好に基づいて新たな関係を形成する機会が豊富に存在する関係流動性の高い社会では、たとえ、あるパートナーと関係を形成しても、そのパートナーよりも魅力的な異性と出会う機会が多い。より魅力的なパートナーと関係を形成した方が適応的であるため、関係の組み換えが起こりやすい(Kito, Yuki, & Thomson 2017)。つまり、このような高関係流動性社会では、新たなパートナーが現れたために既存の関係が崩壊する、「乗り換える」「奪う」「奪われる」事例がより多く見られると予測される。この予測と一貫して、鬼頭(2014)では、低関係流動性社会である日本に比べ、高関係流動性社会であるカナダの方が、奪った経験および奪われた経験のある人が多かった。今後の研究では、これらの社会差が関係流動性によって説明されるかを検討する必要があるだろう。

【注】

(1) 本研究は、異性間の恋愛関係に焦点を当てているため、参加者の性的指向性についても尋ねた。参加者は「恋に落ちたり、性的魅力を感じたりする相手」について、「異性の人」「同性の人」「その時々で、性別は関係ない」のいずれか一つを選択した。「異性の人」を選択した参加者が128名、「その時々で、性別は関係ない」を選択した参加者が３名、「同性の人」を選択した参加者はいなかった。交際経験および恋愛関係崩壊状況の項目は、異性間の恋愛関係に関する表現になっていたため、性的指向性の項目で「同性の人」を選択した参加者がいた場合、これらの項目が提示されないように設定されていた。

【参考文献】

Fox, J., & Tokunaga, R. S., 2015, “Romantic partner monitoring after breakups: Attachment, dependence, distress, and post-dissolution online surveillance via social networking sites. Cyberpsychology,” *Behavior, and Social Networking,* 18, pp.491-498.

Hartup, W. W., & Stevens, N., 1997, “Friendships and adaptation in the life course,” *Psychological Bulletin*, 121, pp.355-370.

鬼頭美江, 2014,「恋人をめぐる略奪と競争－恋愛競争性に関する日加比較研究」『日本社会心理学会第55回大会発表論文集』, p.196.

Kito, M., Yuki, M., & Thomson, R., 2017, “Relational mobility and close relationships: A socioecological approach to explain cross-cultural differences,” *Personal Relationships*, 24, pp.114-130.

桑原進, 2017,「配偶状態・結婚、子供の有無・子供の誕生が 主観的幸福度に与える影響について—生活の質に関する調査結果から—」『ESRI Research Note』29, pp.1-11.

Le, B., Dove, N. L., Agnew, C. R., Korn, M. S., & Mutso, A. A., 2010, “Predicting nonmarital romantic relationship dissolution: A meta-analytic synthesis,” *Personal Relationships,* 17, pp.377-390.

三浦麻子・小林哲郎, 2015a,「オンライン調査モニタのSatisficeに関する実験的研究」『社会心理学研究』31, pp.1-12.

三浦麻子・小林哲郎, 2015b,「オンライン調査モニタのSatisficeはいかに実証的知見を毀損するか」『社会心理学研究』31, pp.120-127.

Rusbult, C. E., 1980, “Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the Investment Model,” *Journal of Experimental Social Psychology,* 16, pp.172-186.

Rusbult, C. E., 1983, “A longitudinal test of the Investment Model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, pp.101-

117.

Schmitt, D. P., Alcalay, L., Allik, J., Angleitner, A., Ault, L., Austers, I., et al., 2004, “Patterns and universals of mate poaching across 53 nations: The effects of sex, culture, and personality on romantically attracting another person’s partner,” *Journal of Personality and Social Psychology,* 86, pp.560–584.

Schmitt, D. P., & Buss, D. M, 2001, “Human mate poaching: Tactics and temptations for infiltrating existing relationships,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, pp.894–917.

和田実, 2000,「大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情お よび 関係崩壊後 の行動的反応 ―性差と恋愛関係進展度からの検討―」『実験社会心理学研究』40, pp.38-49.